
魔法少女リリカルなのはDestiny

翼の鍵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはDestiny

【Nコード】

N4550Q

【作者名】

翼の鍵

【あらすじ】

これは二人の少年が織りなす奇跡の話。
あの「闇の書事件」から2年半
新たな物語が今始まる。

設定資料（前書き）

これは作者がつくった物語です。

そのため原作との関わりはありません。

また原作とは少し違うところもあると思いますが、その点ご了承ください。

設定資料

オリキャラ設定

紫電 洸斗《しでん こうと》

私立聖祥大附属小学校に通うごく普通の小学6年生でこの物語の主人公。

成績優秀容姿端麗で顔は上の中くらい。

モテモテであるが当の本人はなのはの事が好きらしい。

しかし勇気がでないのか告白できずなのはとはいまだに友達関係のままらしい。

一人称は僕。

デバイスはフリードから譲り受けた「エクスカリバー」である。

魔力変換資質電気を持っている。

魔力光は青色である。

フリード・バルス

学校からの帰り道に洸斗が拾った猫。

偶然会った洸斗に魔力資質があるため、理由を述べ「エクスカリバー」を授けた。

好物はみかんで洸斗から貰ったのがとてもおいしかったらしい。

その他詳細は本編中にできます。

中村 戒《なかむら かい》

洸斗の学校に転校してきた少年。

明るくすこし抜けているが頭はそれなりにいい様子。

居眠りが大好きで授業中はよく寝ている。

顔は上の下で一人称は俺。

何か隠し事をしているようだが……

パンドラ

洗斗たちの前に突如現れた少年。顔を奇妙な仮面で隠している。

その姿はどこかで見たような…

デバイスは「パンデミウム」

魔力光は赤紫。

その他いろいろは本編にて紹介します。

デバイス設定

エクスカリバー

フリードから譲り受けた洗斗のインテリジェントデバイスで普段は緑の宝石のような形をしている。

またバリアジャケットは白に蒼い線が入っている。

ベルカ式カートリッジシステムが搭載されている。 ミッド式。

カリバーフォーム

エクスカリバーの基本形態。蒼い長身の両刃の剣。

主に近接戦闘から中距離までの戦闘を得意としている。

ブレイズフォーム

エクスカリバーの第2の形態。蒼い二振りの片刃の剣である。

主に至近距離での戦闘を考慮しており、中・遠距離では意味をなさない。

そのかわり至近距離では攻撃回数と圧倒的な速さで敵を追い詰める。

ザンバーフォーム

蒼い大型の両刃の大剣。 刃の部分は魔力の刃でできており見た

目より軽い。

エクスカリバーの第3の形態

パンデミウム

パンドラが使っているインテリジェントデバイス。

バリアジャケットは黒に紅い線がはいっている。

ベルカ式カートリッジシステムが搭載されている。 古代ベルカ式。

ブレードフォーム

パンデミウムの基本形態。 黒い片刃の剣と鞘がある。

パンドラは基本これのみで戦う。

近中距離での戦闘を得意としている。

チャリオッドフォーム

パンデミウムの第2の形態。 黒い二丁の少し長めの拳銃。

中・遠距離で威力を発揮し、連射も可能であり、撃つまでの早さならどの銃にも引けを取らない。

（連結刃）

特に決まったフォーム名は無いがパンドラがブレードフォームに続きよく使う形態。

名前の通りシグナムのシュランゲフォルムとほぼ変わりはない。

専用技に「サークル ブロウ クラッシュャー」がある。

その他の設定は本編中にできます。

設定資料（後書き）

設定をお読みになってくださってありがとうございます。
これからどんどん続けるつもりなので
よろしく願います。

プロローグ

これは1つの奇跡の物語
一人のなんでもない少年と
一人の少年が織りなす戦い。

それは悲しみを呼ぶのか
新たな出会いを呼ぶのかは分からない

それを知っているのは
神か未来か

闇の書事件から2年半
新たな物語は始まる。

歯車は回り続けそして
いろいろな歯車を巻き込んで回っていく
たとえ途中で狂ってしまっても
いつかはきつと治せる

少年たちの淡い希望は
世界を揺るがす大事件へと発展する。

魔法少女リリカルなのはDESTINY
始まります

高町家の朝？（前書き）

これから始まるのは

何の変哲もない僕が魔法と出会い

そして巻き込まれていく物語

欲していたものは「守るための力」

奪われたものは「記憶」

そして運命は動き出す

魔法少女リリカルなのはDESTINY

始まります。

奇跡と

今、決断のときはせまりつつける。

高町家の朝？

高町家SIDE

？「おはよう、お父さん。」

一人の女の子が入ってきた。

？「ああ、おはよう、なのは。」

な「うん。あ、おはよう、お母さん」

こちらの二人はなのはのお父さんとお母さんの

高町士朗さんと高町桃子さんだ。

？「ああ、おはようなのは。」

？「おはようなのは」

な「うん。おはようお兄ちゃん、お姉ちゃん。」

こちらの二人はなのはのお兄さんとお姉さん

高町恭也さんと高町美由希さんだ。

桃「みんな、ちようどいいわーごはんよ。」

高町「「「はーい」「」」

高町家の朝？

・・・言い忘れてました。

私は高町なのは。つい3年前までは普通の小学生だったけれど
紆余曲折あつて今「魔法少女」をやってます。

全「・・・いただきます。」

いつものことなんです、私のお父さんとお母さんはまだ新婚さ
んみたいに仲良しです。

恭「ホラ美由紀ご飯こぼしてる。」

美「ああ、本当だ。ありがとう教えてくれて。」

やはりお兄ちゃんとお姉ちゃんも仲良しです。

なんか私だけ一人ぼっちな気がします。

・・・

全「・・・ごちそうさまでした。」

ピンポン

桃「あれ？誰かしら。なのはでてちょうだい。」

な「は〜い。一体誰だろう？」

なのはは考えながら玄関に向かった。

な「どなたですか？」

？「僕だよなのは」

な「あ、？君。」

？「どうでもいいが急いでくれよ。」

初日から遅刻はごめんだからな。」

みてみると時計の針はもう少しでバスの出発時間まであと10分を
きっていた。

な「いつけなゝい急がなきゃ。？君もうちよつと待っててね。」
そう言うとなのはは道具を取りに部屋へ戻った。

な「道具は・・・これでよしと。」

？「遅いよなのは」

な「にやはは、ごつめゝん。さあ行こつ。」

？「ああ。急ぐぞ。」

な「それじゃ、いつてきまゝす。」

なのは達はそのまま家を出て行った。

紫電家の朝？

今から遡ること3時間前

紫電家SIDE

？「ふあゝよくねたゝ」。

今何時だゝ？」

彼はこの家の唯一の住人である。

？「おはよう。父さん、母さん。」

そういつて彼は写真の両親に挨拶をする。

そう、彼は昔に両親を亡くしていたのだ。

？「アレからもう2年半か・・・」

あの事故からもう2年半。

1人暮らしにももう慣れた。

？「さあ、ご飯にしよう」

そういつて彼はパンをトーストし、目玉焼きを焼き始めた。

？「そっいやは今日は始業式だったな。」

目玉焼きを慣れた手つきでひっくり返しながらつぶやいた。

？「よし、頃合だな。」

そういつて彼は目玉焼きとトーストを皿に盛った。

？「いただきます。」

・・・

？「ごちそうさまでした。」

彼は食べ終わった皿を手っ取り早く片付け、部屋に戻った。

そして荷物を持って外へ出た。

？「行って来ます。」

ガチャン という音とともに家には
今までにない静けさが戻った。

紫電家の朝？

えゝゝと僕の名前は紫電 洗斗うつく。

私立聖祥大附属小学校に通う小学6年生です。
ちなみに今はある人の所へ向かっています。

こ「さあ、急ごうと。」

僕は知らないうちに足を速めていた。

ゝ高町家ゝ

こ「やっと着いた。」

そして、チャイムを押した。

ピンポーン

？「どなたですか？」

こ「僕だよなのは」

この子は高町なのはさん。

僕がひそかに思っている女の子だ。

な「あ、こうと君。」

こ「あ、じゃねえよ。まあどうでもいいが急いでくれよ。」

初日から遅刻はごめんだからな。」

みてみると時計の針はもう少しでバスの出発時間まであと10分を
きっていた。

な「いつけなゝい急がなきゃ。君もうちょっと待っててね。」

こ「はあゝ。」

それから5分後ようやく高町さんはやってきた。

こ「遅いよなのは」

な「にやはは、ごつめゝん。さあ行こう。」

こ「ああ。急ぐぞ。」

な「それじゃ、いつてきまゝす。」

そうしてようやく僕達は出発した。

高町家からバス停までの出来事

なのはSIDE

こ「ほらっ。急ぐぞ。」

そう言ってこうと君は全力で走り出した。

しかも大雪の中をだ。

な「待つてよっきゃ。」

そういつて走り出した私は滑って転んでしまった。

な「いったゝいい。」

こ「なにやってんだ、おい。ほらよっ。」

そう言ってこうと君は手を差し出してくれた。

な「うん。ありがとう。」

こ「それじゃ行くぞ。」

そういつて彼は手を握ったままは走りだした。

な「（ふえゝ手をつないだままだよゝ／＼）」

こ「どうかしたのか？顔が赤いが？」

な「なんでもないよ。（もゝ鈍感なんだから。）」

こ「そ。あ、やっとバス停が見えた。」

な「あ、ほんとだ。」

こ「やっと着いた。」

ちようどよくバスは来た。

こ「ナゝイスタイミゝングゝじゃ、乗ろうか。」

な「うん。そうだね。」

そうして2人はバスに乗った。

バス停から学校までの出来事

洸斗SIDE

な「おはようございます。」

こ「おーはーようございまーす。」

な「もうちょっとまじめに挨拶しようよ。」

こ「へいへい。」

つとその時、

？「なゝのはゝ。」

？「なのはちゃゝん」

？「なのはゝ。」

つと奥のほうから3人の声がした。

な「アリサちゃん、すずかちゃん、フェイトちゃん。」

走っていくのはを見ながら僕は退避しようとするが、アリサの

「あんたもよ、こうと。」の一言で『強制的』に連れて行かれた。

ア・す・フェ「「おはよう。なのは（ちゃん）」」

な「うん。おはようみんな。・・・あれ？はやてちゃんは？」

フェ「なのは、はやてなら「そうだった」・・・」

な「そういうえは任務中だったね。」

などと僕はわけの分らない話をしているのは達を無視しながら窓の外を見ていた。

とある学校での出来事？

あれから数分がたちようやく学校に着いた。

「ゝであるからしてゝ」

こ「ふあゝ（あゝダリイ）」

な「こうと君あくびしないの。だらしないよ。」

こ「へいへい。（あゝかつたるい）」

な「もうこうと君はゝ。」

ホント始業式つてのはかつたるい。

そう始業式だ。

僕達は始業式に参加している。

話は長えし・・・

ほんとうにだるい

それから数分間は式が続いたが

まあ半分くらいの話は聞いてない。

そして教室に帰ってきた。

まあセンセエの話のほとんどは聞き流していたが

ある話だけはきちんと聞いていた。

それは・・・

とある学校での出来事？

それは・・・

先「みんなに言い忘れていたが、

このクラスに新しい生徒、そう転校生だ。」

全「転校生（ですか）！！！！？」

こ「まじかよ、どんな奴だろう。」

な「ふえ！こうと君起きてたの！！？」

こ「おい、なんか心外だな。僕だっけ起きてるときは起きて話を聞
いてるさ。」

な「え〜でもこうと君「いつもじゃね〜よ」・・・なんでわかった
の？」

こ「お前が言うことは軽くよめんだよ。だてに4年友達やってんだ
よ。」

な「にやはは、それはねえ・・・。」

そ「ういとなのはは笑った。

こ「（か、かかかワイ〜／＼／）」

そのまま僕は顔を赤くし俯いた。

・・・

転校生と昼の出来事

先「ほら、はいつてきなさい。」

？「はい。」

全員はすごく驚いた。（とくに女子が）

先「じこしょうかいを。」

？「俺は、中村 戒《なかむら かい》です。

不束者ですがよろしくおねがいします。」

そういうと中村だったかは微笑んだ。

また、全くの余談だが今のでクラスの女子のほとんどが倒れたのは言うまでもない

先「じゃあこうと君の前の席に座りなさい。」

カ「はい。」

そして、昼 ごはんの時間・・・

あのカイってのはかなりモテモテらしい。

僕は自分で作った弁当を食べながら、考えていた。

こ「（何故僕は彼女達と昼を一緒にしなければいけないのだろう）」
なのはたちはこんな僕の気持ちをわかってくれるわけもなく

ワイワイと楽しんでいる。

と、そのとき

ヒヨイ

こ「あ・・・」

ア「やっぱりこうとのはおいしいわね。」

こ「（ああ～楽しみにとつといたヤツなのに（泣））」

僕は心の中でないた。

そして、屋上の端っこに空の弁当を持ってうずくまった。

な「あ～アリサちゃんこうと君を悲しませた～」

ア「な、なによチヨコッとおかずを拝借させて貰っただけじゃない。

「

す「じゃ、何をとったのかわかる？」

「うっ」とアリサの顔がひきつった。

まあ、結局この事件はアリサの謝罪によって幕を閉じた。

放課後

そして放課後

こ「んあゝ。今日も疲れた。早く帰ろう。」

ア「なによ、こうとつたら寝てばかりだったじゃない。」
す「全くもってそのとおりよね。」

な「にやはは（苦笑）」

フェ「じゃ、私はやる事があるからこれで。」

な「うん！さよならフェイトちゃん。」

ア「じゃあねフェイト。」

す「また明日ね。」

フェ「うん。またねなのは、アリサ、すずか。」

そういうとフェイトは教室を出て行った。

な「それじゃ、私達も帰ろうかこうとく・・・あれ？」

こうとはもうその場にいなかった。

ア「逃げたわね。」

す「うん、逃げたね。」

な「うゝゝゝ。」

その頃僕はなのは達にばれぬように教室を出ていた。

こ「んじゃのんびり帰りますか。」

歩いていると、目の前に傷ついた猫を見つけた。

こ「これは酷いな。」

僕は猫を抱えたまま動物病院へと急いだ。

猫と笑顔とティータイム

　そして数分後　動物病院

こ「それじゃこの子猫をよろしくお願いします。」

先「はい、それじゃあまた明日来て下さい。」

こ「はい。お願いします。」

そついうと、僕は動物病院を後にした。

　紫電家

こ「ただいま。」

そついうと僕は玄関の鍵をしめた。
が、

ピンポーン

こ「誰だよ全く人の休みを取りやがって」

な「わたしだよ」

こ「なんだ、なのはか。」

つと皮肉を言いはしたが内心とてもうれしかった。

こ「で、何のようだ？」

な「だって黙って帰るんだもん・・・」

なのはは悲しそうにうつむいた。

うつ、心が痛む

こ「そう悲しそうにすんな。」

　いつもの笑顔のなのはの方が可愛いぞ。　うん。」

な「えっ／＼／」

なのはは顔を真っ赤にしたが僕は気が付かなかった。

な「（どうしよう、こうと君に可愛いつて言われちゃったよう／＼

／」

こ「おゝいどした？」

な「にゃ！なんでもないよ。」

こ「まあいいからあがれよ。ちよつどよくお茶でもしようかと思つてたところだつたからな。」

な「うん。ありがとう。」

そのあと僕となのはは2時間ほど話して解散した。

こ「今日は楽しかったよ。ありがとう。」

そういつて僕は微笑んだ。

な「にやつ／＼いやお礼を言うのはこつちだよ。」

だつていきなり来た私を追い返さずにお茶に誘つてくれたし・

だから、ありがとう。（こつと君カッコよすぎだよ／＼／）

こ「いや、礼には及ばないよ。」

な「そう。それじゃさようなら。」

こ「うん。それじゃじゃあねなのは。」

そういつて僕はもう一度なのはに微笑みかけた。

な「じゃあまた明日ねこつと君／＼／」

そういつてなのは帰った。

始まりは突然になんだ？

その夜

なのはSIDE

な「これは『イービルコア』の魔力だ。

？《なのは》

な《うん。フェイトちゃん。》

フェ《急がなきゃ》

な《うん。今行く》

な「お母さん仕事があるから行って来ます。」

桃「は〜い。いつてらっしや〜い。怪我はしないでね〜。」

な「わかつてる〜。」

そういつてなのは家を出た。

↓動物病院

な「やっと着いた。ってここは・・・」

そう。ここは私の全てが始まった場所だ。

な「なつかしいな〜。」

フェ「でも感傷に浸っている暇はなさそうよ。」

？「そやな〜。とつとと封印せなあかんわ。」

な「フェイトちゃん、はやてちゃん。」

は「なのはちゃん前、敵はんのおでましや。」

フェ「イクよ。」

二人「「うん！」」

始まりは突然なんだ？

いまからちょうど10分前

こうとSIDE

？《助けて・・・》

こ「！！！！？」

僕はどこから声が聞こえたので思わず立ち上がった。

こ「何処からだ？」

？《助けて・・・》

こ「お前は何処にいるんだ。」

ドクン

こ「なんつだこつれは・・・。」

どこか分ってる？」

そのまま僕は家を飛び出した。

↓動物病院

こ「これは酷い。つは、あの子猫は？・・・いた」

僕は猫を助け出した。

？《助けに来た・・・の？》

こ「おめーが呼んでたのか？」

？「うん。そうだよ。」

こ「うおっ、ね、ね、ねね猫がしゃべった！！！！！！？」

僕はとても驚いた。

つというか驚きすぎて思わず叫んでしまった。

が、何かおぞましいのが襲ってきた。

？「話は後で、とりあえず手伝って。」

こ「どう手伝えと？」

？「これをもって僕が言うあとに続けて言って。」

こ「ああ、わかった。」

そして宝石を受け取った。

？「我は聖剣を継ぐ者・・・」

こ「我は聖剣を継ぐ者・・・」

？「思いを貫く力と・・・」

こ「思いを貫く力と・・・」

？「踏み出す勇気をこの手に」

こ「踏み出す勇気をこの手に！！」

？「エクスカリバー セーットアップ。」

こ「エクスカリバー セーットアップ！！！！！！」

ECくスタンバイレディ セットアップ>

そして僕は光に包まれた。

始まりは突然になんだ？

今から数分前

こうとSIDE

こ「えゝなにこれゝ！！」

いきなりだがかなり驚いていた。

？「ま、まあ落ち着いて。

あ、自己紹介がまだだったね。僕はフリード・バルス。

気軽にフリードって呼んで。」

こ「お、おうそれでフリード。」

フ「ん、なんだい？」

こ「詳細はあとでいいから何をどう手伝えばいいかおしえてくれな
いか？

あ、できれば事情付きで。」

フ「うんわかった。とりあえず僕はこの世界の人間ではない。」

こ「『この世界の』人間ではないってことはお前は人間なのか？」

フ「うん。ま、詳細は後にしても君には魔法の才能がある。

だから僕が探している『イービルコア』集めに協力して欲しい
んだ。」

こ「わかった。」

フ「そんな簡単に！？」

こ「ああ。それよりそのイービルコアってのはなんだ？」

フ「これは僕が偶然発掘したもので第1級搜索物、通称『ロスとロ
ギア』とされている。

ロスとロギアについてもあとで説明するから。」

こ「あれは？」

フ「管理局の局員みたいだね。

あ、危ない！！」

こ「つちい！！」

EC「フラッシュムーブ」

僕はかなりの速さで現場に向かった。

フ「ちょ、ま・・・っていつちやったし。

まあ、あの調子だと使いこなせそうだね。」

始まりは突然になんだ？

こ「（間に合え〜！！！！）」

ガギイイイイン

こ「ふう。間に合った。」

さあ。ここからは俺のターンだ。

どおりやああああ！！！！」

僕は思いっきり斬りつけた。

が傷は浅かった。

こ「なんだコイツ化けモンかよ！」

フェ「なのは〜。あれこうと！！！！」

こ「なっフェイトあぶねえって。」

フェ「ごめんなさい。」

は「この人誰？」

フェ「は yet は知らなかったっけ？

彼は「紫電 洸斗だ」

は「そうなん。よろしくな〜こうと君」

な「ん、ん〜。」

フェ「あ、なのはが目を覚ました。」

始まりは突然になんだ？

「……………つというわけです。」

な「そうだったんだ……ありがとう！こうと君。」

こ「ん／＼ああ。（カワイすぎんだろオイ！）」

？「お話しのほうは終わったかしら？」

フェ「うん……じゃなかった。はい、リンディ提督。」

リ「そう。フェイト、そこにいる人も含めてみんなで一旦アースラに帰還してください。」

フェ「な・は」「了解」「」

こ「へ？」

フ「え？」

？「それじゃあ転送するよ。」

な「お願いします。エイミーさん。」

エ「それじゃあ『転送』」

始まりは突然になんだ？（後書き）

遂に第1章も終わりました。

初めて描いてみたのですが結構辛いですね。

さあつぎからはいろいろと事情が明らかになっていきます。
楽しみに待っていてください。

あと感想などを頂けるとうれしいです。

最後にこんな駄文を読んでくださりありがとうございます。
これからもよろしく願います。

つくづく思うようになってるんだ（前書き）

これから始まるのは

1人の少年の物語。

手に入れたものは仲間

失ったものは日常

そんな中運命は留まることを知らない。

そして運命の歯車は回り続ける。

つくづく思うようになってるんだ

・・・結局連れて行かれるのかよ。

こうとSIDE

こ「ここは何処だ？」

な「ここはアースラ。私達の旗艦なの。」

こ「へえ」

僕はつくづく思った。

僕らの世界とは別の世界があるとは聞いてたけれど・・・

こ「こんなに発達してんのかよ~~~~~!!!!!!」

思わず叫んでしまった。

フェ「驚くのも無理は無いけど、とりあえず落ち着こう。ね？」

こ「ああ悪い」

は「ふふふ。」

な「さ、リンディ提督の所へ行こ」

フェ「うん。そうだね。」

は「ほな、行こか。」

こ「ん？ああ。」

こういつて僕達は歩き出した。

ねえ此処は何処？（泣）

「……んで此処は何処だ？」

「こ………」

「な………」

「何でこんな事になっているのかと言うと、」

「リ……」

「この人の仕業である。」

「全く未恐ろしい」

「フェ「ね、ねえこうと。」

「こ「ん？なんだ？」

「フェ「結局の所こうとは巻き込まただけだよね？」

「こ「ああ。そうなるね。」

「フェ「じゃあなんで事情を聞きにきたのに黙ってるの？」

「今入ってきたフェイトに説明する事にした。」

「こ………」

「顎をさすとフェイトもようやく分ってくれたらしく」

「フェ「そう………」

「つと話を終わらせた。」

「フェ「ってか提督、それは始めての人の前で飲んじゃだめだってあれほと言ったのに」」

「リ「そうごめんなさいねこうとさん。」

「こ「ん、まあいいですよ。ただちょっとした過去を思い出しただけです………」

「な「こうとくん………」

「なんだかしんみりとした空気になってしまった。」

「……ねえ本当に此処は何処？（泣）」

ねえ此処は何処？（泣）（後書き）

作「すいません。長らく放置しててごめんなさい。」

こ「うん。でもさ忙しかつたんでしょ？」

作「そのお心遣い感謝します。」

しかしこれからはちよくちよく更新する予定です。」

こ「だから、これからよろしく」

第22羽（前書き）

また間が空いてすみません。
それでは駄文ですが本編どうぞ

第22羽

エンドレスカオス状態から脱出しただいまこうと復活待ち

こ「着ていきなり精神的ダメージとかないわ。」

な「にやはははははは・・・」

「とりあえず貴方はただの一般人で偶然力を手に入れたわけね。」

こ「まあ、そうなりますね。」

「貴方はこれからどうするの？」

こ「今までどおり平和に暮らしますよ。」

それよりも話は済みましたか？ 帰りたいんですけれど

リ「え、ええありがとう。」

なのはさん達も家に帰ってゆっくりお休みなさい。

「それでは。」

な「さようなら。」

「ほなさいなら。」

「フェ、あとでねお母さん。」

と、僕達は帰っていった。

ひとつ言っていていいかい？

「かなり眠いんですが。」

僕は帰って直ぐにベットに入って1日を終えた。

始まり（前書き）

今回からあとがきにて談話が始まります。
お楽しみに

始まり

これは2時間ほど前に遡る

? side

?「此処がファーストコンタクトの場所かな？」
少年は呟いた。

?「本当にキレイなとこだな。」

彼は俯きながら言葉を紡いだ。

?「本当はこんなキレイな所プライベートで来たかったんだけど・・・」

そう呟いた彼は奇妙な仮面をかぶると言った

?「さあ、始めようか。復讐の宴を」

そういつて彼は消えた《・・・》。

こうと side

~~~~~

こ「んん?んん」。

目を開けるとそこは白い空間だった。

こ「此処は一体?」

?「こんにちは。運命の騎士。」

こ「!!あ、あなたは?」

?「ああ。私はエクスカリバーの先代の持ち主の  
シュバリエ・ラ・ライルよ。」

こ「えーとシュバリエさんはどうして此処に?」

シュ「私は伝えることがあつて此処に来たの。」

いい?よく聞いてね?・・・

そういつて彼女は語り始めた真実を・・・



それは真実・・・？

~~~~~

こ「それでシュバリエさんどういった用で？

てか伝えることって？」

僕はそのシュバリエ（？）さんに訊いた。

シュ「それはまず貴方にはこの先いろいろな不幸と幸せが降り注ぎます。」

不幸に絶望しないで、幸せに浸りすぎないでください。」

こ「ええ。肝に銘じておきます。」

「まず」ということは他にもあるんですね？」

シュ「ええ。こっちの方が大事ね。」

まず貴方の術式はミッドでもベル力でもありません。」

こ「それって「いいから聞いてください。」・・・はい。すいません。」

「

シュ「詳しいことはエクスカリバーに聞いてもらいますが、

これとあと此処には3機あります。」

こ「コレのほかには？」

シュ「ええ。つともう時間ですね。」

もう一生会えないとは思いますがお元気で。」

彼女の体はどんとと透けていく。

こ「貴方もお元気で。」

シュ「それでは「奇跡の天使」いや「奇跡の聖騎士」よ。」

それは真実・・・？（後書き）

か「いやあ今回は洗斗の夢の中だったな。」

こ「ああ、そうだったな。」

じゃねえよ！！いや本編で出てねえのにでていいのかよ。」

「「いいんだ（よ）」」

こ「いや作者まで入ってきたし。」

翼「いや此処は時間軸ずれてるし」

戒「まあそういうわけだ。」

洗「く・・・まあいいが名前が漢字になってるんだが。」

翼「作者の勝手で次回からキャラクターの名前が漢字になります。」

洗「んじゃあ次回。ぼくのデバイスの秘密が明らかに。」

戒「それは一体何なのか。」

「「それは次回」」

それは真実・・・？

~~~~~

洸「ん？ん。夢か？」

エクスカリバー。」「

EC「なんでしよう。マスター」

洸「やっぱりシュバリエって人を知ってるんだな。」

EC「！！！！。どうしてマスターがそれを？」

洸「シュバリエさんが夢の中で言ってたんだが術式ってのはどう違うんだ？」

EC「話は聞きましたよね。」

魔法にはミッド式とベルカ式が存在しています。

しかしそれ以外にも源初の魔法術式のアルハザード式があります。

しかしそれよりもほかにほとんどの方は知りませんが「アーク式」というのも有ります。

私は表向きには古代ベルカとなっていますが本来はアーク式です。」「

洸「ふーん。そうなんだ。」

EC「しかし、今の状態だと使えません。」

洸「なんでだ？」

EC「私にもよく分かりませんがロックがかかっています。」

洸「ふーん。まあいいや。そこらへんはそのうち何とかなるでしょ。」

」

EC「そうですね。」

洸「じゃあ準備して学校に行くか。」

僕は起き上がり部屋を出て行った。

それは真実・・・？（後書き）

洗「・・・・・・・・・・。」

EC「・・・・・・・・・・。」

洗「なあ。」

EC「何でしょうか。」

洗「今回エクスカリバーが初めてまともに話した気がするんだけど。」

「

EC「そうですね。」

洗「このままだとあんまり喋らないかも。」

EC「それは困りますね。」

洗「どうしよう。もう話すことが無いんだが。」

EC「奇遇ですね。私も同じことを考えていました。」

洗「じゃあ終わるか。」

EC「そうですね。」

洗「というわけで次回もヨロシク。」

「バイバイ」「ノシ

『友達』（前書き）

また間が開いてしまいましたすみません。  
それでは本編どうぞ。

## 『友達』

~~~~~そして時間は過ぎ

洸「もう放課後・・・か。」

僕は寝ていて気づくと一人・・・・・・・・ではなかった。
僕は彼を起こすことにした。

洸「おい、起きろ。放課後だぞ。」

戒「うーん」

洸「起きたか？」

戒「さんきゅ・・・えーつと紫電・・・だったか？」

洸「洸斗でいい。中村。」

そついうと彼は微笑み

戒「じゃあ俺も戒でいいぜ。」

洸「ああ。よろしくな戒!!」

戒「ふつ。よろしくな洸斗。」

洸「ああ!!!!」

キーンコーンカーンコーン

戒「やば。帰ろうぜ。」

洸「ああ。」

僕は新しい友達（こちらの的には）ができた。

「バイバイ」

翼「感想など書いてくれると嬉しいです……グッ（バタ）
↑倒れた音

予告（前書き）

今回は番外編ということだったのでちが詰まったら書く予定の小説の予告です。
どぞ

予告

それは1人の犯罪者と2人の死んだはずの人達から出来ている家族
と・・・・・・・・

『P・T事件』と『闇の書事件』を解決した3人の少女を取り巻く
物語・・・・・・・・

「俺は十六夜 蓮だ。ヨロシク。」

ちよつとひねくれてる元犯罪者の青年^{いさよいれん}十六夜蓮

「私は流々、十六夜流々よ。」

新しい名と綺麗な心を手に入れた旧プレシアⅡテストロッサ

「わたし？わたしは凜。十六夜凜だよ。」

同じく新しい名と命を貰った旧アリシアⅡテストロッサ

「私の名前はなのは。高町なのはなの。」

まっすぐな不屈の心を持つエースオブエース高町なのは

「わ、私の名前はフェイトⅡⅡハラオウンだよ。」

プロジェクトFで生み出されたというくらい過去をもつ少女フェイ

トⅡⅡハラオウン

「私の名前は八神はやて。平仮名ではやてや。よろしく。」

最後の夜天の王八神はやて

彼らは出会いそして新たな道を開いていく・・・・・・・・

魔法少女リリカルなのは〜罪と正義の狭間〜
近日更新予定

予告（後書き）

つということでは新タイトルは

魔法少女リリカルなのは〜罪と正義の狭間〜
です。

おたのしみに〜……………しといてくれると嬉しいかな？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4550q/>

魔法少女リリカルなのはDestiny

2011年4月27日23時21分発行